

# 琉球大学学術リポジトリ

原稿：『植民及植民政策』第十章 植民政策の概念

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2018-04-16 キーワード (Ja): 矢内原忠雄 キーワード (En): Yanaihara Tadao 作成者: 矢内原, 忠雄 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/38370">http://hdl.handle.net/20.500.12000/38370</a>

# 矢内原忠雄文庫

史料名	原稿『植民及植民政策』第十章 植民政策の概念 (植367~386、387~414)
封筒番号	467
原文所蔵者	琉球大学附属図書館
撮影年月日	平成17年11月21日
撮影者	富士写真フイルム 株式会社
備考	

# 矢内原忠雄文庫

封筒番号：467

史料名	原稿『植民及植民政策』第十章 植民政策の概念(植367～386、387～414)
資料形態	B4原稿用紙／2綴り
枚数	48
页数	48
縦 (cm)	
横 (cm)	
厚さ (cm)	
書誌的事項	植民  今泉分類記号：Y

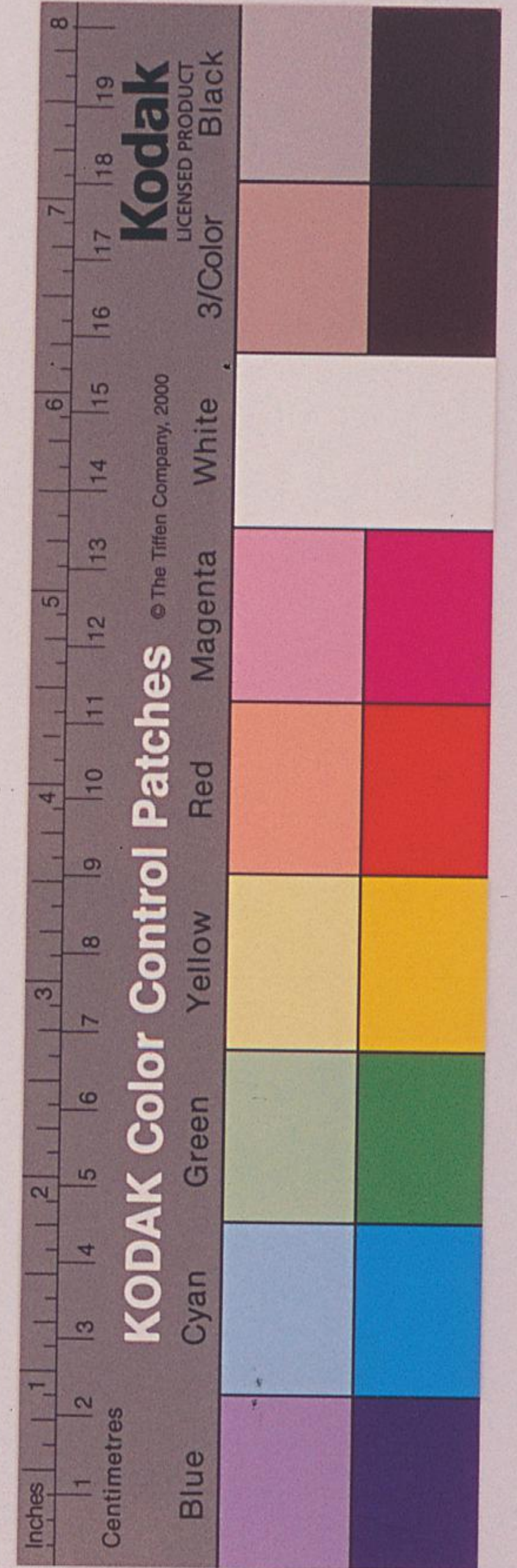
社会的  
自由

967

人の行為は見えざる手に導かれ、「攝理」の中  
 にあまたありてあることは、<sup>の自然神学的信仰</sup>自由放任の政  
 策の哲學的根拠を為せるものであつた。又  
 「人類は彼等の社會的生產に於て、一定の必然的の、彼等の意志より獨立したる  
 關係に、即ち彼等の物質的生產力の一定の發展階段に適應する所の生産關係に  
 入り込むものである」  
 とマルクスの唯物史觀の分派はマルクス  
 階級闘争の主張の哲學的基礎であつた。第一  
 こそ然りせば人の社會的治佛は「攝理」若くは「彼  
 等の意志より獨立したる關係」によりて支配せ

- 6
- 一 植民政策の概念 <sup>及以の範圍</sup>
  - 二 社會政策 <sup>（若くは）</sup> 社會政策
  - 三 植民政策の方針及以の變遷

1) Marx, K. Zur Kritik der Politischen Oekonomie. 序文.  
 (河上肇、唯物史觀研究、P. 6 の譯による)



植民地政策の概念

3、1、必然的、宿命的、機械的のよりとせぬは其  
 らぬからうか。こゝにも亦人の意志の自由及  
 い必然に属する根本的現はれり。  
 思ふに人間の社会的生涯は價值生活である  
 。社会的洗滌はその事實が價值判断の對象と  
 なるとなると、其の洗滌は彼他観念を以て  
 指導せらる。社会的洗滌は客観的には社会学  
 則の必要より出で、根柢若くは生産関係の範  
 圍内<sup>（これは）</sup>に於てのみ可能である。よして七拘らず  
 凡この社会的行為は人々の意識を通じて行は  
 る、もつてあるから、主観的には彼他判断を  
 伴ふものあり、<sup>（従つて）</sup>意志は攝理的必然の範圍内  
 に於て自由である。

即ち社会的活動をなすに當り如何にせば最大の價値を獲得するや、換言すれば  
 その設定したる特定の目的に對し最も合理的なる手段は何たるやの觀念を伴ふ  
 之れ政策の一の社会的事實として存在する所以である。

植民地は社会政策の必要に基き、<sup>（自由政策）</sup>一の社会政策  
 であるが、既に社会政策は以上政策的要素  
<sup>（自由政策）</sup>に存在する。植民地洗滌に關し價值判断に  
 基きたるもの、所謂合理的なる社会的の意識  
 的干渉亦即ち植民地政策である。

2  
植  
308

● 植民政策の内容は、植民地（實質的或は形式的）の設立及び維持に關するもの、植民地に於ける活動に關するものあり。植民地を所有することが

社会群の生活にヒリ如何なる價值を有するや  
、植民地を統治（及ぶ）植民地に於ける社会的経済  
的活働に關しては如何なる方針が最も社会群  
の生活に在目的たりや其の向後を見よ。既に  
何か故に及ぶ如何に  
植民地を維持（維持）する假使判明な植民地政策の  
内容たる以上、植民地（地）の放棄又は獨立もまた  
之に含まるゝものと解すべきである。トナ木  
は、「英國が植民地を如何に維持し得るか」

國民の本能が彼等をして移住せしめ、併合せしめたる場合に、  
彼等は植民地を形成すべきでなかつたか、屬領を獲得すべきでなかつたか、  
或は植民地や屬領を既に有するならば、能ふ限り之を拋棄すべきである

とか論ずるものは、恰かも少年に對して大人と  
なるとするの如き、又は既に大人たるは能  
く心行連かに少年時代に復歸すべきである  
論ずる如しと言ふが、少くとも植民地を領有  
關係に就ては少年と大人との比喩は當らぬ  
。寧ろ家族に於ける父と見女との關係に譬ふ  
べきである。見女や出生甚くは養子は原則と

3  
道  
369

1) Lucas, Introduction to Lewis' Government of Dependencies  
p. 111

了て自給的の必要に事なくしつゝあるが、尚意欲  
 の干渉を容るゝ、故にあり(他は他り別段) 既に  
 出生し居るは養子とせし見せ養育の方針あり  
 (他は他り経済(経済)の後に之とありて  
 自給的の維持すべき也(他は他り維持はなしと  
 自給的の干渉の對象となすことある。而して未  
 成年の時期に成て子女と放棄することか、父の  
 義務に反すとせば、不習の時に就ていつ迄も  
 之を子供扱ひにすべし、亦同様に義務に反す  
 るあらう。故に他は他り利益の同然なりとする  
 規定の立場よりするも、義務の向は、子りと  
 する、親親的の立場よりするも、政策の主張及び  
 研究は他は他り任意相放棄又は独立に及ぶと  
 亦あり。

他は他り  
の主体

他は他り政策の主体は、他は他り社会群(他は他り)の側と  
 其の母体たる社会群(本國)との側になす。其  
 の國家たると公私団体たるとの間は、或は  
 其の國も、団体たるや、或は、個人は政  
 策の主體たるを得(或は、蓋し國家や公私団體の政策といへども、個人の發意に  
 よりて成立し、その實行も個人の行為によるのであるが、發意又は實行は政策  
 そのものとは異なる。政策は社會的なる意識的干渉である。その干渉が政策の客  
 體について社會的效果を興ふるのみならず、政策の主體についても社會的意義  
 を有しなければならぬ。干渉それ自體が社會的、團體的干渉たるを要するもの  
 と解す。

4  
396

植民地政策の意義

5  
植  
391

山本博士も亦一個人を以て植民政策の主体たるを得ずとせざる、其の理由は私と異り個人は政策遂行の實力を有せざる可故にして、  
 甲を 實際に施すの途無き軍他なる個人の意見は未だ以て眞の意義に於ける政策と稱するを得ずと為すのである。併し實力を以て比較せしか富裕なる個人の實力は小国作或は十國家に勝ることを有り得る。近世植民の初期に於ける領土政治 (Proprietary Government) の創設及び維持も亦個人企業的性質を有するものありたるを以て、  
 乙を 山本に當る政策として發表せざる、意志を一個人の意志に止まるか或は団体的意志を表現するや否やはありて、政策主体の概念を決定するを以て正者とせぬべきでない。  
 丙を 植民政策の主体は上述の如く植民者と本國と両方面を有する列、  
 丁を 西有の政策は必ずしも同一の利害關係に立たない、  
 戊を 本國の植民地政策は必ずしも植民者の利益を以てし、  
 己を 植民地政策の主体は植民者の見地から原住者の

山本博士、植民政策研究 P.48-49





7  
植  
999

(4) ATHENA

植民地  
の歴史

自由主義

自由主義

主し得べくんば、かくして成るべきあり。  
 植民地政策の範圍は植民地の特殊なる事情に  
 よりて異なり、<sup>(變遷した)</sup> 國の經濟の要求に度  
 して歴史的に<sup>(變遷した)</sup> 自由主義の時代  
 には國の又は特許会社は植民地の全版に  
 亘り廣汎なる干渉を爲した。<sup>(1)</sup> 自由主義の時代  
 は利殖は國家の植民地干渉を排斥し、<sup>(2)</sup> 是は  
 自由主義の時代は、<sup>(1)</sup> 唯一の利益なき貿易  
 植民地、<sup>(2)</sup> 實際は、<sup>(3)</sup> 利益なき貿易が  
 ありとを指摘する。<sup>(4)</sup> アダム・スミスは、<sup>(5)</sup>  
 ありては、<sup>(6)</sup> 自由主義の時代は、<sup>(7)</sup> 自由主義の時代は、<sup>(8)</sup>  
 内に國に對する植民地の創設に對しても、<sup>(9)</sup> 或は  
 治と誇るべき何物をも持たない<sup>(10)</sup> のであり、<sup>(11)</sup> 従  
 つて彼は植民地社會の發達に對する自由主義  
 國家の干渉政策の有<sup>(12)</sup> 無<sup>(13)</sup> 他を論ずる。自由主義  
 と高調した<sup>(14)</sup> のである。然るに J. S. ミルに對しては自由放  
 任を原則と認め、<sup>(15)</sup> 七、<sup>(16)</sup> 高個人の各自の利益

2) Smith, A. Wealth of Nations. Vol II. P. 89

1) 例へばスベレの Casa de Contratacion. (P. 2)  
又は和蘭東印度会社の 独立政策の如し。

の最良の判別をなすは、即ち国家的干渉の行はるべき場合を更に廣き範圍に亘りて列挙し、個人の利益

の實現の爲めに共同的動作を必要とし、共同的動作の有効なる爲めには法律の保障と確認を必要とする場合」なる項目に於て、勞働時間の短縮問題と共に Wakefield の植民法を挙げ、  
"The right of a Patient, Pauper, Aged or Sick Person" "個人が行爲が自己の利益の範圍を遙かに越えて、國民又は後世の利益に對する深き影響を含む場合"の例として、植民を論じて居る。

「植民地の建設は専らその最初の建設者の私的利益にのみ着眼して爲さるべきではなく、將來この小なる端緒より起るべき國民の永久的幸福を慎重に考慮して爲されることの望まじきは何人も異論なかるべし。かくの如き考慮はその事業を最初から識見高き立法者の先見と深慮によりてつくられたる規則の下に置くことによりてのみ得られる。而して國家のみが斯くの如き規則を制定し、或はその遵守を強制するの力を有する。」  
又、「大規模の植民の、經濟的事業としてはたゞ國家、或は國家と完全なる領解

ある個人が團體によりて行うべき得ること  
一 英國に於て英國自由貿易の制は確立されり  
いはゆるが、植民地に於ては自由放任の政  
策は完全に遂行せられたること  
は、  
一 ルールス法は代を日て規則の時  
代といふ、蓋し英國は原則として自由放任  
の政策を採用せるに拘らず、植民地に於ては  
特種費財の援助を継続し、又新領土を獲得

8  
植  
394

4) 同上 P. 971

1) Mill, J.S. Principles of Political Economy. P. 963-76.  
2) 同上. P. 970-975  
3) 同上. P. 970

帝國主義

9 植 395

を避くるの決心をなせしむるが、予定は旅  
 2は絶えずその領土を擴張し、その責任を増  
 加するに止りなかつたのであつた。17) だが  
 レーリ<sup>ル</sup>は植民地に因する財政的負担の故に、  
 「平等の仕業におへない植民地は吾人の首にか  
 けらるし塵白である」といふた。18) は一八五二年  
 であつたが、一八七二年には彼が帝國的調査  
 を高調して帝國主義者の魁となつた。ケラツ  
 ドストンは自由主義の戦士として、植民地に因  
 しては消極的政策を宣明せしむるに拘らざ、彼の  
 内閣の下に於て近世特許會社の結成たる北ホ  
 ルネオ会社は特許せしむ、又スーダン遠征が  
 敢行せしむたのであつた。而して過去に於て  
 は、一般の視に從つては、政策と結果との關係  
 は原則として甚だ稀薄であつて、英帝國の車  
 運は偶然の連続に依りて擴張せしむたもの  
 であつた。これはともあれ、一八九五年の工  
 ハレン氏 (Joseph Chamberlain) の植民大臣とな  
 たり以來は明確なる政策に基く治御があつた。<sup>3)</sup>  
 自由放任の消極政策より建設的なる帝國主義

3) Egerton, British Colonial Policy in the Twentieth Century. P. 1.

1) Knowles, Economic Development of the Overseas Empire. P. 93-94  
 2) Disraeli. "These wretched colonies... are a millstone round our necks." (Malmesbury, Memoirs of an Ex-minister. P. 343. — Schumpeter, Imperialism. S. 8 1053).

獨逸社會主義の地

勞働階級の地

ATHENA

10

10

植  
396

我への推移はかくして十九世紀末の趨勢  
 となつた。獨逸の地は消極的然  
 度は忽ち之の過渡に跳きこも知り、國家は  
 積極的の地を實行するに至つた。<sup>1)</sup>  
 くて二十世紀の諸國家はその地を結合せ  
 單國に維持し、及び之を合理的に開發するの  
 必要と應ずる範圍に於て遂行するに至つた。  
 あり。

植民政策は通常有階級  
 の向負であり、  
 非特有階級  
 政策と

想像すや、労働階級は之に對して直接の利害  
 關係を有せざるものと想像せられ、従つて各  
 國の社會黨<sup>黨は</sup>労働階級の利益を代表す  
 る<sup>黨は</sup>の地を政策親は、國內的對する分  
 如くに有力に答へせしめられ<sup>争かつた</sup>採心  
 あり。私は今獨逸兩國について其の大勢を親  
 考へやうと思ふ。

獨逸社會主義黨<sup>初</sup>の地は領有の<sup>は</sup>  
 的批評的態度を取つた。→ハーゼンクレ  
 ー、リールブルクネヒト、フォルマー<sup>2)</sup>等<sup>の</sup>の  
 フォルマー<sup>2)</sup>等<sup>の</sup>の

6) Hasenclever, Liebknecht, Vollmar. (Noske, G. Kolonialpolitik und Sozialdemokratie. SS. 26, 34, 56, 59 等)

6) 「地を發展の初期に於ては理解せしむるは其の主義、即ち地  
 國家は過渡の地を於ては地民の法に依るべきなり、  
 大なる40の特許金業手にその權利と義務とを兼ねたる針  
 には~~（不發給）~~撤去せしめられ又撤去せしむるべきなり。而して  
 國家自ら海外領土の開發責任を行使はるべきなり。」 (Köber, Kolonialpolitik. S. 227)

11  
植  
397

社會主義黨議決は、アフリカ又は南洋の獨逸  
 植民地は、経済的価値に乏しく、且つ労働階級の  
 肥と国外に轉せしむるに<sup>(目的)</sup>より<sup>(國內)</sup>社會的  
 上の要を冷却せしむる<sup>(目的)</sup>奸策なりと<sup>(目的)</sup>し、植民  
 地防衛には概ね反對を表明し來つた。即ち上  
 等の植民地は特權地としてその条件を備へず、  
 大に土人との通商にありて利益を得べきや  
 べからずか、又寧ろ土人は<sup>(目的)</sup>文化程度を<sup>(目的)</sup>く購買力  
 小なるを以て<sup>(目的)</sup>輸出の利益も亦期待するに  
 足らざるゆゑ、寧ろ植民地に要する費用を  
 以て國內の<sup>(目的)</sup>発展を<sup>(目的)</sup>用むべし、國力の<sup>(目的)</sup>増進を<sup>(目的)</sup>救ふ  
 べし、<sup>(目的)</sup>購買力を<sup>(目的)</sup>増加するに<sup>(目的)</sup>加か<sup>(目的)</sup>ず<sup>(目的)</sup>り<sup>(目的)</sup>ブルク  
 ネストの言を借らば、<sup>(目的)</sup>諸君の<sup>(目的)</sup>輸出するは<sup>(目的)</sup>社會  
 的<sup>(目的)</sup>利益ありや、<sup>(目的)</sup>諸君は<sup>(目的)</sup>アフリカの<sup>(目的)</sup>沙漠及<sup>(目的)</sup>沼澤  
 上の<sup>(目的)</sup>空氣權を<sup>(目的)</sup>以て<sup>(目的)</sup>國民の<sup>(目的)</sup>眼を<sup>(目的)</sup>眩惑するもの  
 ありと考へたり<sup>(目的)</sup>あつた。然るに<sup>(目的)</sup>能速<sup>(目的)</sup>政府は  
 此<sup>(目的)</sup>スマルツの<sup>(目的)</sup>消極政策を<sup>(目的)</sup>放棄すべし、<sup>(目的)</sup>亦<sup>(目的)</sup>植  
 民地<sup>(目的)</sup>に<sup>(目的)</sup>對する<sup>(目的)</sup>國家<sup>(目的)</sup>直接<sup>(目的)</sup>干渉は<sup>(目的)</sup>深入り<sup>(目的)</sup>し<sup>(目的)</sup>て<sup>(目的)</sup>ま  
 た<sup>(目的)</sup>、<sup>(目的)</sup>ボルトン<sup>(目的)</sup>と<sup>(目的)</sup>レル<sup>(目的)</sup>ト<sup>(目的)</sup>（<sup>(目的)</sup>Banking）<sup>(目的)</sup>が<sup>(目的)</sup>植民地<sup>(目的)</sup>と<sup>(目的)</sup>なる  
 や<sup>(目的)</sup>植民地<sup>(目的)</sup>の<sup>(目的)</sup>擴張<sup>(目的)</sup>的<sup>(目的)</sup>用途<sup>(目的)</sup>に<sup>(目的)</sup>關する<sup>(目的)</sup>擴張<sup>(目的)</sup>的<sup>(目的)</sup>政策と

② Noake. 前出 s. 26-27  
 4) 同上. s. 34-35

12  
978

11  
二

や地帯の経済的開發に關する積極的政策を

一、一九〇六年デルンブルヒに於て地帯の地位を  
 變の注意も次第に此に向けるに至つた  
 如く地帯の所有の事實の態度に伴ひ地帯の  
 地位の注意も次第に此に向けるに至つた  
 一、一九〇六年デルンブルヒに於て地帯の地位を  
 變の注意も次第に此に向けるに至つた  
 如く地帯の所有の事實の態度に伴ひ地帯の  
 地位の注意も次第に此に向けるに至つた

新  
 進言を主としてこの注意は地帯の地位に對して  
 向けるべきものであり大會に於て始めて  
 する注意すべき事項のありたるは一九〇〇年  
 マインツの大會であつた。此後、膠州灣占領  
 に及ぶまでの決議がなされた。次で一九〇四  
 年ブルメンの大會に於ては、ハレロ（Halo）  
 争を中心とする討論があつた。此は、  
 西貢アフリカ非難に、ハレロ族の叛亂鎮定費  
 に於て、進言を主として、彼地に於ける  
 人種保護の必要は、さういふべからず、ハレロ族  
 に及ぶの歴史を加へべき危険ありとの理由に  
 より、さういふ必要を棄てた。左の如くであつたが、  
 覺の大會に於ては、此の態度を承認し、  
 此の討論に於て、地帯の地位に對しては、今後、  
 是すべしとの要が、  
 地帯の地位に對しては、今後、  
 是すべしとの要が、  
 地帯の地位に對しては、今後、  
 是すべしとの要が、

須

13 399

社会主義  
後進の二

(4) ATHENA

樹立し、植民地問題を中心として戦を  
 角電に挑み遂に帝國議會を解散した。而して  
 一九〇七年の総選挙はパルプス等の熱烈なる  
 運動に拘らず、社会主義党の惨敗に終わった  
 ある。之より植民政策に熱心な政府党  
 に於ても、又反社会党たる社会主義党に於ても  
 頗る増加した。  
 然るに社会主義党は在りて植民政策に對  
 して二派の見解が分ちて居た。一はカウツキ  
 一等の急進派にして主義として近世植民政策  
 に反對し、他の一はベルンスタイン考の修正  
 派にして主義として植民政策を是認した。と  
 の方針を是正すべしとなすものである。而して  
 この二派の見解の差異は、一九〇七年のスト  
 ヲトガルトに於ける國際労働者及社会主義者  
 大會及び同年エッセンに於ける植民社会主義  
 党大會に於ける激論を生じしやうである。  
 スツツトガルトの「國際」作社を以て會議に於て  
 植民問題の討議せらるゝや、委員會はオラウ  
 ンの代表者コル (Karl Kautsky) の提議に基  
 きてその案

1) Parvus. Die Kolonialpolitik und der Zusammenbruch.  
 は七年の総選挙の前後に於て植民地及び有の階級に對する  
 無益有害を主張したる選挙戦の名残である。  
 (社会主義)

新



「會議は植民政策の利益の一般に、特に労働者階級にとりて、強く誇張せらるゝを承認す。併乍ら社會主義的政府の下に文明的に漸進し得べき植民政策を、原則的に、且つ凡ての時に亘りて排斥するものにあらざ」と決議した。然るに總會に於てはこの提議はくつがへされて次の如く決議せられた。

「會議は、資本主義的植民政策はその本質上必然に植民地の原住民の屈從強制的労働、若くは絶滅を伴ふこの見解を有す。資本主義的社會の標榜する開化的使命はその征服掠奪慾を被ふこの口實に過ぎない。社會主義的社會にして始めて凡ての民族に對して完き文化にまで發達するの可能性を提供し得。資本主義的植民政策は生産力を増進せず、却て土人を奴隸化し貧民化することにより、及び人を殺し地を荒す戦争によりて、その(資本主義的)方法の移植せられたる地方の自然の富を破壊する。かくしてそれは文明國の貿易及び工業品の販路の發展をすら緩慢にし或は阻害する。會議は資本主義的植民の野蠻的方法を批難し、生産力發展の利益の爲めに、平和的文化的發展を保障し、地球上の天然資源を全人類のより高き進歩に貢獻せしむべき、一つの政策を要求する。云々」

四月年エツセンに於ける独逸社會民主黨大會に於ても討論の點、本の總會決議が承認された

而して右委員等<sup>決議</sup>と總會決議との間に何等則的の差異も存在する。即ち前者は<sup>現代</sup>資本主義判の下に於いても植民政策は利益あるものなりと、其の價值を<sup>不常に</sup>高調せしむるが、且つ是の矛盾が種々不正をなすといふに反し、後者は現代資本主義判の下に於ける植民政策とは根本的に排斥するものである。之より亦急進派との争に外ならずなり。後者は一般に排斥するものではなく、アメリカの如き「

14  
38  
植

1) Nozke. 前出. S. 225-227.

偉植地は、~~それ~~自体は ~~それ~~ 則として 至定せらる  
 べきにあらず、却て人種発展の有力なる一極  
 杆として認めらるべきなりであるが、今日に  
 至つては「かくの如き植地的近衛を可能なら  
 ざる餘地が或程度に重要な大きに能く <sup>殖</sup>植地  
 あり、~~従つて現実の阿羅と~~ 採取植地  
 ありのみならず、而して此種の植地政策は、  
 凡この支配に反抗する生産階級の倫理的奉獻  
 及び人類の生産能力を阻害するの極度の事  
 實に基きて否認せらるべきものとす。

ヴァイルヘルム、  
 リーブクネヒトとある。

「農業植地その他眞實の植地は或る時代に於て非常なる效用を有した。  
 人類文化は概して植地と分離するを得ない。希臘の植地、アメリカ發見後  
 成立せし植地、濠洲の植地——之等は凡て偉大なる文化的事業であつた。」<sup>1)</sup>  
 「現今の植地競争は今日の有産的社會の死の舞である、云々」<sup>2)</sup>  
 然るに修正派社會主義者は <sup>反映</sup> 此の如くは現代  
 に於ては 植地政策は 生産力発展の <sup>必然</sup> 的 的 には  
 必ずしも必要ならず、植地政策の 原 産 品 展  
 示品の輸入は 植地への 欧 州 商 品 の 輸 出 量  
 も遂かに重要なりとなつて、<sup>3)</sup> 主 小 米 一 二 日 本  
 に施ける生産力の限度は <sup>不可</sup> 越 する。 <sup>3)</sup> 帯 的  
 植地の生産物の利用が 排斥せらるべきもの  
 であり、<sup>3)</sup> 帯 的

15 植  
 981

- 6
- 1) Kautsky, K. Sozialismus und Kolonialpolitik.
  - 2) Nozke 前出. S. 34-35
  - 3) Schippel, Max. Tropenererschliessung und europäische Wirtschaftsentwicklung. (Sozialistische Monatshefte, 1908. 1. Bd. S. 82 以下)

16  
植  
382

ATHENA (4)

ないといふは、かくの如き植民地を自ら経営することも亦排斥せざるべきはあり得る。経営は必ずしもやむを得ない。如何なる種族か、そのや (Kolonie) の場合にも最も重要な四つ大である。沿海人の熱帯地方巨額が有住者の生活に害するは、然るなく、又はは今日迄一般的に起りし一帯かつた。伊、南米、南人の土地に排斥する権利はたいてい限らるる範圍に於てのみ認めらるる得る。此に於ても非帯の陸には富文化の富な権利を持つ。土地の権利は、是れは占有の権利が利用に於ては歴史的権利を失ふるものである。若し左と云ふ事は、是れより土人の種族社会に即接をせしむべきである。是れは、在来中の障礙を、在来の生産手段は、所有形式の撤廃は根本的的内部改造、換言すれば、所有権の撤廃は、所有の前提とする。マルクスは、特に周知の基礎的事實である。文藝復興による文化的修級絶望の行脚は必然である。且つ植民地は植民地系民衆の生産

- 1) Bernstein, E. Die Voraussetzungen des Sozialismus. S. 211
- 2) Schippel, M. Kolonialpolitik und Marxismus. (Soz. Monatsheft. 1916. 14. Heft. S. 745-746)
- 3) Bernstein, Die Kolonialfrage und der Klassenkampf. (Soz. Monatsheft. 1907. 2. Bd. S. 911).

17 植 583

養力を必おし七破壞セズ。一口に植民政業と  
 言フても、或は托中地と新に征服せんとす  
 場合とあり、又既得托中地の角登に属すも  
 のあり、後者の言法亦一様ならず。故に無差  
 階級は原則的<sup>(無差別)</sup>に凡そ托中政策を否定するこ  
 とは出直さず。托中地を放棄すべ  
 せとあるは、アフリカに於ける部族子闘争  
 、奴隷貿易、火酒輸入を全自由に放任すべ  
 きとあるは、托中地の放棄は、<sup>托中地への</sup>侵略  
 的<sup>(托中地への)</sup>侵入を廢する效果を有せず。と  
 大い望東家の行脚に於ける監督境の撤廃と意  
 味するのみ。かくの如く托中地は、<sup>托中地への</sup>侵略  
 的<sup>(托中地への)</sup>侵入を廢するのみならず、又國民的  
 的<sup>(托中地への)</sup>利益を有するものも是れな  
 い。無差階級も亦自國の合理的なる地阻  
 的<sup>(托中地への)</sup>利益を有する。1) 社會民主主義  
 的<sup>(托中地への)</sup>利益を有する。2) 歴史  
 的<sup>(托中地への)</sup>利益を有する。

1) Bernstein, E. Die Kolonialfrage und der Klassenkampf.  
 (Soz. Monatshefte. 1907. 2. Bd.)  
 2) Bernstein. Voraussetzungen. s. 205

植

984

力が少キ一加之業の見解に反対せるは既に述べた。彼は植民地の放棄を以て本國に要産業階級及び植民地に對する利益ありと爲し、社會主義党は列強の植民地を放棄を促進すべしと認すあり、とは放棄すべしや否やの向路にあるか、如何にして放棄すべしや(二二二)の向路なり。併し資本主義階級は決して自發的に放棄することありとすべしに非ず、吾人現代の向路は出来得るだけ植民地を自發を促す植民地の擴張に反対するにあり。植民地の叛亂は却つて獨立の時期を遠延せしむるも、其の間に此の間に於ては、世界政治の進展に伴ひて、植民地は漸次獨立の打撃を受けることと論じた。既に植民地領有の予定(預め)而して即時に放棄を主張せしむる以上、全然植民地政策に於て消極的態度を取ると許さるべし、或は植民地自治の促進に、或は人道的土人政策の主張に、社會主義党の注意は益々植民地に向けるべしとすを得(か)た。

植民地は漸次獨立の打撃を受けることと論じた。既に植民地領有の予定(預め)而して即時に放棄を主張せしむる以上、全然植民地政策に於て消極的態度を取ると許さるべし、或は植民地自治の促進に、或は人道的土人政策の主張に、社會主義党の注意は益々植民地に向けるべしとすを得(か)た。

1) Kautsky. 前出書. 375-76.

（独逸）  
世界大戦  
は、  
托  
地  
喪  
失と  
緊  
急  
の  
電

社会主義の激進主義は、  
向ける。 一九一四年の  
不満足、有力の、  
神國の、  
一九一四年の  
戦争の進行と共に、  
めに巨額せられた。 而して戦争を終了、  
多教派社会主義は、  
の反響を熱心に主張する、  
可独逸、  
に、  
権利及び、  
ひきつら。 此は、  
代表者は、  
方御者及び、  
日に、  
老の、  
今や、  
國主義的、  
民の、  
この、

社会主義の激進主義は、向ける。一九一四年の不満足、有力の、神國の、一九一四年の戦争の進行と共に、めに巨額せられた。而して戦争を終了、多教派社会主義は、の反響を熱心に主張する、可独逸、に、権利及び、ひきつら。此は、代表者は、方御者及び、日に、老の、今や、國主義的、民の、この、

社会主義の激進主義は、向ける。一九一四年の不満足、有力の、神國の、一九一四年の戦争の進行と共に、めに巨額せられた。而して戦争を終了、多教派社会主義は、の反響を熱心に主張する、可独逸、に、権利及び、ひきつら。此は、代表者は、方御者及び、日に、老の、今や、國主義的、民の、この、

1) Sarrant. Mise en Valeur. P. 91

19  
985

説明  
ターゲット

この原本  
は、破損の  
まま撮影し  
ます。

(+) ATHENA

20 植 386  
 本(古) 革命後の独逸国民議事も亦他  
 回復を<sup>原</sup> 宣<sup>呼</sup>、多数派社会党<sup>(自)</sup>も立<sup>に</sup>考<sup>加</sup>  
 一七、 独立国家  
 も子<sup>民</sup>議事<sup>に</sup> 既<sup>に</sup>  
 独逸政府<sup>は</sup> 依<sup>に</sup>  
 にも<sup>て</sup> 他國にも<sup>せ</sup>  
 一七は<sup>は</sup> 他國の權利を<sup>認</sup>  
 年十月十一日の国民議事  
 地との差別が行はるゝや、  
 惜別の<sup>情</sup>をつらね、独逸の  
 張いた<sup>て</sup>、ひと<sup>り</sup> 独立社会民主党の代表者へ  
 二ヶは<sup>は</sup> 独逸他國の<sup>印</sup> 績及<sup>の</sup> 他を<sup>否</sup> 認し  
 地<sup>民</sup>大臣の<sup>見</sup> 解<sup>に</sup> 全<sup>然</sup> 反<sup>対</sup>、他<sup>民</sup> 思<sup>志</sup>  
 ち<sup>は</sup> 党<sup>に</sup> 拒<sup>絶</sup> する<sup>た</sup> ら<sup>し</sup> 全<sup>力</sup> を<sup>つ</sup> く<sup>す</sup> べ<sup>し</sup>  
 との<sup>宣</sup> 言<sup>を</sup> 為<sup>し</sup> た。<sup>3)</sup>  
 他<sup>民</sup> 地<sup>の</sup> 領<sup>有</sup> の<sup>事</sup> 實<sup>は</sup> は<sup>は</sup> 領<sup>土</sup> 過<sup>と</sup> 共<sup>に</sup> 敗<sup>存</sup>  
 宣<sup>と</sup> 一<sup>の</sup> 實<sup>力</sup> を<sup>社</sup> 会<sup>民</sup> 主<sup>党</sup> 上<sup>に</sup> も<sup>加</sup> へ、  
 獨逸は<sup>清</sup> 純<sup>的</sup> 獨逸<sup>公</sup> 民<sup>の</sup> 評<sup>的</sup> 獨逸<sup>に</sup> 特  
 り、<sup>中</sup> 心<sup>を</sup> 独逸<sup>的</sup> 政策<sup>を</sup> 形<sup>成</sup> せ<sup>ん</sup> と<sup>す</sup> る<sup>の</sup> 傾  
 向<sup>を</sup> 示<sup>し</sup> ぬ。殊<sup>に</sup> 獨逸が<sup>政</sup> 治<sup>上</sup> の<sup>實</sup> 権<sup>に</sup> 近<sup>づ</sup>

3) 同上. S. 106-110 (Henkeの演説)

1) Poeschel, H. Die Kolonialfrage im Frieden von Versailles. S. 230-231.

2) 同上. S. 94

英國労働党  
植民地

くに従つてその主張は急進的色彩を帯びた  
 最後は遂に多教派と独立派と合一して一  
 党を組織したが、<sup>近時</sup>植民地政策に於て  
 植民地回復の要求の<sup>漸く</sup>強くなり、一九二五年  
 夏には<sup>植民地</sup>議院内に<sup>植民地</sup>各政党内の<sup>植民地</sup>  
 會が組織せられた。<sup>植民地</sup>クヱセル (Quessell) が<sup>植民地</sup>  
 この理事となつた。<sup>植民地</sup>植民地主義は  
 かく植民地に於ける執着を脱し去るべきである。  
 私は次に英國労働党の植民地政策観につき一  
 瞥を與へ<sup>せよ</sup>。

英國労働党の關心事も亦主として<sup>植民地</sup>  
 内政にまつて、<sup>植民地</sup>植民地の内政にもう注意の向  
 けらるゝは比較的近代のことに於ける<sup>2)</sup>  
 一九一九の五年<sup>1)</sup>最近の世界戦争に到る迄  
 はその態度は寧ろ消極的であり、多くは自由  
 党の騎士に追隨して之を援助するの地位に立  
 った。<sup>植民地</sup>植民地<sup>植民地</sup>植民地は<sup>植民地</sup>植民地  
 界の變動によりて自由党の勢力失墜し、労働  
 党の地位は代りて有力となるや、<sup>植民地</sup>植民地  
 對しては<sup>植民地</sup>植民地的の政策を立つるの必要を増し

植  
987

2) 労働党大会の始めに印交の同盟を議したのは1911、労働党大会  
 の始めに正式に印交同盟を議したのは1919であった。(Tsiang, T.  
 R. Labor and Empire. pp. 47, 54)

1) Koloniale Rundschau, 1925. Heft 8. (Schnee, H.  
 Die Interfraktionelle Koloniale Vereinigung). Quessell  
 は Sozialistische Monatshefte の同人にして所謂修正派の一人  
 であるから、こゝに甚名の見せるのに不思議もない。



だが、併し乍ら、<sup>（マカサカ）</sup>陛下の御意に依りて、植民地  
 問題に對しては、<sup>（比較的）</sup>微温的の  
 政策を有し、たゞに過おなかつた。

英國が協定の  
<sup>（植民地）</sup>外交政策を研究せる  
 シ、<sup>（シアン）</sup>これは、之を以てコブデン、

グライトリア等  
<sup>（急進）</sup>の自由主義者の衣鉢を紹ぐも

のなりとし、その特徴を要約して、<sup>（植民地）</sup>帝国主義

、小英國主義 <sup>（The Englishman）</sup>と稱し、<sup>（左）</sup>たゞ

研究が平和的調の国際主義、自由貿易、<sup>（植民地）</sup>植

植民地より利益保護の主張を有し、<sup>（植民地）</sup>未だる長は

、<sup>（植民地）</sup>グライトリア時代の自由主義者の流を汲む

、<sup>（植民地）</sup>植民地の侵略獲得に反対し

、<sup>（植民地）</sup>植民地の利益保護を主張する長に於て

は、<sup>（植民地）</sup>植民地主義者といふを得るけれども、<sup>（植民地）</sup>植

地を以て首につまみたる<sup>（植民地）</sup>磨白の如く、<sup>（植民地）</sup>厄介物

視し、之を以て<sup>（植民地）</sup>消極的の他を有するのみ

、<sup>（植民地）</sup>以て棄きを以て勝水りとするといふ可如き

意味に於て、<sup>（植民地）</sup>小英國主義者であること

は、<sup>（植民地）</sup>出来ぬ、<sup>（植民地）</sup>彼の英帝國の存在を以て既存の

事実と見、<sup>（植民地）</sup>故て之が放棄を主張し、<sup>（植民地）</sup>ない。

スノ

1) Tsing. 前出, pp. 171-172, 215, 220.

植  
 588

27  
植  
389

一デニ曰く、「英帝國は一つの予集である。その  
 建設せしむるに方法に秘しては吾人は吾人の意見  
 を有する。併し自らその事は事實であり、而して  
 かく責任を引受けし以上吾人は軽々しく之  
 を放棄するを得ない。否、吾人は全全之を放  
 棄するを得ない。自治的ドミニオンに属する  
 限り帝國の目的は困難少くして却つて可能性  
 が多し。現在帝國と自治ドミニオンとを結合さ  
 げ合を弱め若くは破壊すべからざる如く行部を  
 取らし、その退歩逆轉である。……非  
 アングロ  
 サクソンの肩の向は多々の困難を有する  
 併し自ら若くは吾人は吾人の行政  
 吾人の仲間たる吾人に福利をよぶるの精進  
 によりて導かれ、吾人の利益のみに依る  
 採取するの務に由るべき、又若し吾  
 人の政策が之を吾人の民を訓練して一大  
 の自治國体たらしむるに向けられざるを  
 吾人の統治をより強し、吾人の善事を  
 認せしむるべからざる。……  
 帝國主義の誘引は是  
 り英國が印が直轄地その他の如き  
 領域より英

1) 1925年に開かれた第一回英帝國労働党及労働組合大会 (The First  
 Conference of the Labour Parties and Trade Unions of the  
 12) 於て帝國的結合に關し、「英帝國 British Commonwealth の成立は、  
 神が自然の運命の暴力が何かは知らず吾人を結合せしめたものである……  
 ……偶然に於てか討伐によりてか吾人は相互的に世の全体の一部とな  
 った。而して吾人の欲するは欲せざるは偏らず吾人は相互的に連結せ  
 られた。即ち英帝國は、現実の政治的單位と為すものであり、  
 労働運動に從するに於ては吾人は何人も英帝國の消滅を  
 希望するのではない。吾人は勿論、吾人の予集に對し誇りを感じて責任を感ずる。  
 經濟的帝國主義の民衆を解放するの責任を感ずる」との趣旨を決議した。  
 (Round Table, Dec. 1925. p. 124-125)  
 No. 61.

國の統治を撤退するは平等の承認して自治を得せしむる所以にあらず。却て他國の侵略的計畫の餌食たりしむるもつてある。英帝國の内の承認に於ける労働党の政策は、その任次に人道的にして正義の政治を保障することあるべからざる。一若くはかくり如き政策に平等の承認は、自治ドミニオン<sup>カ</sup>の地位を上り得るが如く、一大民主的共同國家の一員として認めらるるの利益を労働党の瞭解すべきを拂ふ、理由は正しいであらう。労働党内には又帝國

の天然資源開發の爲めに自治ドミニオンと協力すべきを信する。吾人は支那の海外ドミニオンを如く、私としていけり。おんは、<sup>本國</sup> (Holland) の一部分と見なせしむるべきなり。その間は純にふりこ隔てらるゝに過ぎず、そのよへ交通の改良によりて狭めらるゝつゝある。一併し自ら開闢(英國ドミニオン)の關係は、(ドミニオン)の天然資源の開發を妨ぐるが如く、之を維持せしむることには、皆士英國の諸縣の富の開發障礙がその商業を助けしむるが如く

24  
390

25  
植  
89/

あり、云々。即ちスノーデンは植民地  
 の守衛として存在することに立脚し、  
 植民地を併呑するも又列國の侵襲を防止する  
 の并外観念よりすも植民地放棄の地きは  
 然る考の外に置くのみならず、一大共同國家  
 の利益を以て暗黙のうちに承認して居る。  
 植民地を併呑すべきや否やの問にありては、  
 何に之を統治すべきや否やの問に過ぎない。  
 如何に帝國的利益を大にせんかとの政策に  
 過ぎないのがある。其意には、  
 小英國主義者  
 出し得ない。スノーデンの思案は、  
 4. スミスと想執せしむる。大  
 5. スミスと想執せしむる。大  
 6. スミスと想執せしむる。大  
 7. スミスと想執せしむる。大  
 8. スミスと想執せしむる。大  
 9. スミスと想執せしむる。大  
 10. スミスと想執せしむる。大  
 11. スミスと想執せしむる。大  
 12. スミスと想執せしむる。大  
 13. スミスと想執せしむる。大  
 14. スミスと想執せしむる。大  
 15. スミスと想執せしむる。大  
 16. スミスと想執せしむる。大  
 17. スミスと想執せしむる。大  
 18. スミスと想執せしむる。大  
 19. スミスと想執せしむる。大  
 20. スミスと想執せしむる。大  
 21. スミスと想執せしむる。大  
 22. スミスと想執せしむる。大  
 23. スミスと想執せしむる。大  
 24. スミスと想執せしむる。大  
 25. スミスと想執せしむる。大  
 26. スミスと想執せしむる。大  
 27. スミスと想執せしむる。大  
 28. スミスと想執せしむる。大  
 29. スミスと想執せしむる。大  
 30. スミスと想執せしむる。大  
 31. スミスと想執せしむる。大  
 32. スミスと想執せしむる。大  
 33. スミスと想執せしむる。大  
 34. スミスと想執せしむる。大  
 35. スミスと想執せしむる。大  
 36. スミスと想執せしむる。大  
 37. スミスと想執せしむる。大  
 38. スミスと想執せしむる。大  
 39. スミスと想執せしむる。大  
 40. スミスと想執せしむる。大  
 41. スミスと想執せしむる。大  
 42. スミスと想執せしむる。大  
 43. スミスと想執せしむる。大  
 44. スミスと想執せしむる。大  
 45. スミスと想執せしむる。大  
 46. スミスと想執せしむる。大  
 47. スミスと想執せしむる。大  
 48. スミスと想執せしむる。大  
 49. スミスと想執せしむる。大  
 50. スミスと想執せしむる。大  
 51. スミスと想執せしむる。大  
 52. スミスと想執せしむる。大  
 53. スミスと想執せしむる。大  
 54. スミスと想執せしむる。大  
 55. スミスと想執せしむる。大  
 56. スミスと想執せしむる。大  
 57. スミスと想執せしむる。大  
 58. スミスと想執せしむる。大  
 59. スミスと想執せしむる。大  
 60. スミスと想執せしむる。大  
 61. スミスと想執せしむる。大  
 62. スミスと想執せしむる。大  
 63. スミスと想執せしむる。大  
 64. スミスと想執せしむる。大  
 65. スミスと想執せしむる。大  
 66. スミスと想執せしむる。大  
 67. スミスと想執せしむる。大  
 68. スミスと想執せしむる。大  
 69. スミスと想執せしむる。大  
 70. スミスと想執せしむる。大  
 71. スミスと想執せしむる。大  
 72. スミスと想執せしむる。大  
 73. スミスと想執せしむる。大  
 74. スミスと想執せしむる。大  
 75. スミスと想執せしむる。大  
 76. スミスと想執せしむる。大  
 77. スミスと想執せしむる。大  
 78. スミスと想執せしむる。大  
 79. スミスと想執せしむる。大  
 80. スミスと想執せしむる。大  
 81. スミスと想執せしむる。大  
 82. スミスと想執せしむる。大  
 83. スミスと想執せしむる。大  
 84. スミスと想執せしむる。大  
 85. スミスと想執せしむる。大  
 86. スミスと想執せしむる。大  
 87. スミスと想執せしむる。大  
 88. スミスと想執せしむる。大  
 89. スミスと想執せしむる。大  
 90. スミスと想執せしむる。大  
 91. スミスと想執せしむる。大  
 92. スミスと想執せしむる。大  
 93. スミスと想執せしむる。大  
 94. スミスと想執せしむる。大  
 95. スミスと想執せしむる。大  
 96. スミスと想執せしむる。大  
 97. スミスと想執せしむる。大  
 98. スミスと想執せしむる。大  
 99. スミスと想執せしむる。大  
 100. スミスと想執せしむる。大

2) 1917年印度に對しては、100,000,000の英鎊を為すに  
 輸入税の賦課として輸入税引上。案は、英國議会で提出した  
 とき Snowdenは他の自由貿易の支持者と共に Lancashire  
 地方を代表して印度貿易の引上を反対した。(Siang, 前出 P. 48-  
 49)。印度に對する自由貿易の要請は、印度に對するドミニオン  
 賦課の主張(案)と如何に之を調和せしむるに、ドミニオン賦課は  
 關稅自主権を如何に包含する(案)が、印度の關稅運轉に  
 對しては Snowdenの一大 Homelandの思案は、自由貿易の  
 的要素を如何に持つ(案)である。

1) Snowden, P. If Labour Rules, 1923, P. 47-49.

26  
592

あるかと。アダムスミスが自ら植民地の位置  
 的放棄と帝國的統合とを遂行する形に於て提  
 出せられた政略は、甚だしい相違といはれぬ  
 らぬ。百スーデンの思想は十九世紀末の  
 更に樂觀的である。これに於ては印交  
 銀貨の連続と併して、試みは連続せしめられ  
 る。この理由の下に主張したるは、併し乍ら  
 存続に於ける印交銀貨の英印交銀貨に於  
 ける価値は、併しは、現存する植民地的見解  
 を表白したるのみならず、大帝国の保存及び  
 前途、エグスーデンの描きたる帝佛交政府  
 の植民政策の輪廓である。これは、併しは、  
 國主義の所以を呼ぶべきものではない。  
 トーマスの主張せる帝佛交植民政策も亦同  
 しく「地球の四分一と地球人口の四分一以上と  
 の英帝国内に包含せしむるの事案」<sup>2)</sup>として  
 良好の政治を以て「アフリカ人を採取せしめ、  
 却つて之を文化化する」<sup>3)</sup>の帝佛交の目的を  
 りといひ、<sup>3)</sup>印交に於ては「印交は英帝国内  
 に於ける自治ドミニオンとあるべきである」  
 とある。

2) Thomas, J. H. When Labour Rules. 1920. P. 125.  
 3) 同上 P. 135

1) Snowden. 前出. P. 53.

半世労働党政府の下に能く其の目的到達に  
 對するあらゆる権限の與へらるべきであらう。  
 新体制をとるに、即ちの自治は今日労働党  
 政府の(成立する)の昨日より實現せらるべきであらう。  
 のよばなく、先づその必要ある教育である  
 といふ。即ち(英帝國)の存続を前提とし、漸進  
 的文化政策を主張せらるべきの外なきこと  
 斯くの如き政策は労働党の主張である。近  
 般に主張せらるべきありし交にして、労働党の階  
 級の利益に基く何等の主張を認めない。  
 スピーデンと大英大臣としてトマスと托下  
 臣とせしる労働党の托下政策が、印  
 度及びの(國)の(志士)に對し甚るき失望を與  
 へた。その結果として、労働党の主張は  
 の左翼分子に對し甚るき不満を生じた。其  
 差は甚るることであつた。<sup>2)</sup>  
 労働党の主張は、其の性質を以て、  
 的でありし理由は、労働党の特性なりと稱せ  
 らるべきである。其の傾向は、その性質を以て、  
 労働党の主張は、其の性質を以て、  
 労働党の主張は、其の性質を以て、

27  
植  
399

2) Roy, M. N. The Empire and the Proletariat. (The Labour Monthly. Jan. 1925)  
 Abdullah, M. The Trust of Empire and Mr. MacDonald a Trustee. (The Labour Monthly. April. 1925)

1) 同上. P. 138-139.

999

的打撃と興へ得ハしと爲し、従つて  
 分並セし出ることはより資本家階級に致る  
 要件ありとす経済学理論に基き、植民地を  
 占領し以て資本家階級の存続に對する根本的  
 的打撃と興へ得ハしと爲し、従つて  
 も存する植民地政策の相違を述べらるる  
 論よりこの中述べてあるは  
 固の結合と鞏固せんとすべしとあり、然し  
 此の上植民地政策の現行は此の階級闘争  
 の植民地の進歩の鞏固的措置を被るは  
 の見地に立り、社会主義者は、植民地政策に對  
 する他派的不参加を主張する。大七一、山部  
 久は独逸修正派社会主義者及北条孝より、資本  
 家階級は、其の植民地政策に對し、  
 資本家階級の利益を、植民地政策に對し、  
 資本家の眼前の利益を、植民地政策に對し、  
 を認め、以て其階級の根本的利に反對する

ATHENA (4)  
 上座の如く、独逸社会主義者及北条御覺  
 は植民地政策の事實に基き、  
 の改良を主張するのみならず、  
 資本家階級の存続に對する根本的  
 的打撃と興へ得ハしと爲し、  
 要件ありとす経済学理論に基き、  
 植民地を占領し以て資本家階級の  
 存続に對する根本的打撃と興へ得  
 するは、資本家階級の存続に對し、  
 資本家階級の利益を、植民地政策に  
 資本家の眼前の利益を、植民地政策に  
 を認め、以て其階級の根本的利に

29  
995

もつとまし、<sup>1)</sup>又世界戦争論政に改カウツキ  
 一、無産階級の祖國を守るに干戈を取りて立  
 つべきを主張して、こゝ國民主義  
 資本家の帝國主義の存続を仰ぐも  
 無産階級は階級闘争の現(世界的合同)線實現の  
 絶好機會と矢張り争ひつゝのた<sup>2)</sup>ハ  
 穩健論者が植民政策の方針を改良するより  
 一、急進論者は先づ階級闘争の一戦略として植  
 民政策と否定するに、<sup>2)</sup>よりこゝ社会主義的國  
 家と實現せんとするものがある。今做りに純  
 粋なる社会主義國家の實現ありとして、社会  
 主義的植民政策なるものは存在するにあらうか。  
 たりと假定して、<sup>2)</sup>と植民政策と關係を考  
 考へやえ  
 一九〇七年工ツセニ、<sup>1)</sup>植民政策は社会主義大  
 會に於て、<sup>2)</sup>植民政策の排斥に關連して、<sup>3)</sup>社会  
 主義的植民政策は「<sup>4)</sup>ブルジョア社会主義的  
 植民政策の未來曲である。吾人が將來國際的地  
 位に立つとき、吾人が植民地について何をなす

erialismus, der Weltkrieg  
ratie. 559

1) Gorter, H. Der Imperialismus, der Weltkrieg und die  
 Sozialdemokratie. 1914. S. 59.  
 2) 同上. S. 72-73.



30  
396

(\*) ATHENA

へきやは、和母の知らぬことと告  
 白する<sup>1)</sup> <sup>2)</sup> <sup>3)</sup> <sup>4)</sup> <sup>5)</sup> <sup>6)</sup> <sup>7)</sup> <sup>8)</sup> <sup>9)</sup> <sup>10)</sup> <sup>11)</sup> <sup>12)</sup> <sup>13)</sup> <sup>14)</sup> <sup>15)</sup> <sup>16)</sup> <sup>17)</sup> <sup>18)</sup> <sup>19)</sup> <sup>20)</sup> <sup>21)</sup> <sup>22)</sup> <sup>23)</sup> <sup>24)</sup> <sup>25)</sup> <sup>26)</sup> <sup>27)</sup> <sup>28)</sup> <sup>29)</sup> <sup>30)</sup> <sup>31)</sup> <sup>32)</sup> <sup>33)</sup> <sup>34)</sup> <sup>35)</sup> <sup>36)</sup> <sup>37)</sup> <sup>38)</sup> <sup>39)</sup> <sup>40)</sup> <sup>41)</sup> <sup>42)</sup> <sup>43)</sup> <sup>44)</sup> <sup>45)</sup> <sup>46)</sup> <sup>47)</sup> <sup>48)</sup> <sup>49)</sup> <sup>50)</sup> <sup>51)</sup> <sup>52)</sup> <sup>53)</sup> <sup>54)</sup> <sup>55)</sup> <sup>56)</sup> <sup>57)</sup> <sup>58)</sup> <sup>59)</sup> <sup>60)</sup> <sup>61)</sup> <sup>62)</sup> <sup>63)</sup> <sup>64)</sup> <sup>65)</sup> <sup>66)</sup> <sup>67)</sup> <sup>68)</sup> <sup>69)</sup> <sup>70)</sup> <sup>71)</sup> <sup>72)</sup> <sup>73)</sup> <sup>74)</sup> <sup>75)</sup> <sup>76)</sup> <sup>77)</sup> <sup>78)</sup> <sup>79)</sup> <sup>80)</sup> <sup>81)</sup> <sup>82)</sup> <sup>83)</sup> <sup>84)</sup> <sup>85)</sup> <sup>86)</sup> <sup>87)</sup> <sup>88)</sup> <sup>89)</sup> <sup>90)</sup> <sup>91)</sup> <sup>92)</sup> <sup>93)</sup> <sup>94)</sup> <sup>95)</sup> <sup>96)</sup> <sup>97)</sup> <sup>98)</sup> <sup>99)</sup> <sup>100)</sup> <sup>101)</sup> <sup>102)</sup> <sup>103)</sup> <sup>104)</sup> <sup>105)</sup> <sup>106)</sup> <sup>107)</sup> <sup>108)</sup> <sup>109)</sup> <sup>110)</sup> <sup>111)</sup> <sup>112)</sup> <sup>113)</sup> <sup>114)</sup> <sup>115)</sup> <sup>116)</sup> <sup>117)</sup> <sup>118)</sup> <sup>119)</sup> <sup>120)</sup> <sup>121)</sup> <sup>122)</sup> <sup>123)</sup> <sup>124)</sup> <sup>125)</sup> <sup>126)</sup> <sup>127)</sup> <sup>128)</sup> <sup>129)</sup> <sup>130)</sup> <sup>131)</sup> <sup>132)</sup> <sup>133)</sup> <sup>134)</sup> <sup>135)</sup> <sup>136)</sup> <sup>137)</sup> <sup>138)</sup> <sup>139)</sup> <sup>140)</sup> <sup>141)</sup> <sup>142)</sup> <sup>143)</sup> <sup>144)</sup> <sup>145)</sup> <sup>146)</sup> <sup>147)</sup> <sup>148)</sup> <sup>149)</sup> <sup>150)</sup> <sup>151)</sup> <sup>152)</sup> <sup>153)</sup> <sup>154)</sup> <sup>155)</sup> <sup>156)</sup> <sup>157)</sup> <sup>158)</sup> <sup>159)</sup> <sup>160)</sup> <sup>161)</sup> <sup>162)</sup> <sup>163)</sup> <sup>164)</sup> <sup>165)</sup> <sup>166)</sup> <sup>167)</sup> <sup>168)</sup> <sup>169)</sup> <sup>170)</sup> <sup>171)</sup> <sup>172)</sup> <sup>173)</sup> <sup>174)</sup> <sup>175)</sup> <sup>176)</sup> <sup>177)</sup> <sup>178)</sup> <sup>179)</sup> <sup>180)</sup> <sup>181)</sup> <sup>182)</sup> <sup>183)</sup> <sup>184)</sup> <sup>185)</sup> <sup>186)</sup> <sup>187)</sup> <sup>188)</sup> <sup>189)</sup> <sup>190)</sup> <sup>191)</sup> <sup>192)</sup> <sup>193)</sup> <sup>194)</sup> <sup>195)</sup> <sup>196)</sup> <sup>197)</sup> <sup>198)</sup> <sup>199)</sup> <sup>200)</sup> <sup>201)</sup> <sup>202)</sup> <sup>203)</sup> <sup>204)</sup> <sup>205)</sup> <sup>206)</sup> <sup>207)</sup> <sup>208)</sup> <sup>209)</sup> <sup>210)</sup> <sup>211)</sup> <sup>212)</sup> <sup>213)</sup> <sup>214)</sup> <sup>215)</sup> <sup>216)</sup> <sup>217)</sup> <sup>218)</sup> <sup>219)</sup> <sup>220)</sup> <sup>221)</sup> <sup>222)</sup> <sup>223)</sup> <sup>224)</sup> <sup>225)</sup> <sup>226)</sup> <sup>227)</sup> <sup>228)</sup> <sup>229)</sup> <sup>230)</sup> <sup>231)</sup> <sup>232)</sup> <sup>233)</sup> <sup>234)</sup> <sup>235)</sup> <sup>236)</sup> <sup>237)</sup> <sup>238)</sup> <sup>239)</sup> <sup>240)</sup> <sup>241)</sup> <sup>242)</sup> <sup>243)</sup> <sup>244)</sup> <sup>245)</sup> <sup>246)</sup> <sup>247)</sup> <sup>248)</sup> <sup>249)</sup> <sup>250)</sup> <sup>251)</sup> <sup>252)</sup> <sup>253)</sup> <sup>254)</sup> <sup>255)</sup> <sup>256)</sup> <sup>257)</sup> <sup>258)</sup> <sup>259)</sup> <sup>260)</sup> <sup>261)</sup> <sup>262)</sup> <sup>263)</sup> <sup>264)</sup> <sup>265)</sup> <sup>266)</sup> <sup>267)</sup> <sup>268)</sup> <sup>269)</sup> <sup>270)</sup> <sup>271)</sup> <sup>272)</sup> <sup>273)</sup> <sup>274)</sup> <sup>275)</sup> <sup>276)</sup> <sup>277)</sup> <sup>278)</sup> <sup>279)</sup> <sup>280)</sup> <sup>281)</sup> <sup>282)</sup> <sup>283)</sup> <sup>284)</sup> <sup>285)</sup> <sup>286)</sup> <sup>287)</sup> <sup>288)</sup> <sup>289)</sup> <sup>290)</sup> <sup>291)</sup> <sup>292)</sup> <sup>293)</sup> <sup>294)</sup> <sup>295)</sup> <sup>296)</sup> <sup>297)</sup> <sup>298)</sup> <sup>299)</sup> <sup>300)</sup> <sup>301)</sup> <sup>302)</sup> <sup>303)</sup> <sup>304)</sup> <sup>305)</sup> <sup>306)</sup> <sup>307)</sup> <sup>308)</sup> <sup>309)</sup> <sup>310)</sup> <sup>311)</sup> <sup>312)</sup> <sup>313)</sup> <sup>314)</sup> <sup>315)</sup> <sup>316)</sup> <sup>317)</sup> <sup>318)</sup> <sup>319)</sup> <sup>320)</sup> <sup>321)</sup> <sup>322)</sup> <sup>323)</sup> <sup>324)</sup> <sup>325)</sup> <sup>326)</sup> <sup>327)</sup> <sup>328)</sup> <sup>329)</sup> <sup>330)</sup> <sup>331)</sup> <sup>332)</sup> <sup>333)</sup> <sup>334)</sup> <sup>335)</sup> <sup>336)</sup> <sup>337)</sup> <sup>338)</sup> <sup>339)</sup> <sup>340)</sup> <sup>341)</sup> <sup>342)</sup> <sup>343)</sup> <sup>344)</sup> <sup>345)</sup> <sup>346)</sup> <sup>347)</sup> <sup>348)</sup> <sup>349)</sup> <sup>350)</sup> <sup>351)</sup> <sup>352)</sup> <sup>353)</sup> <sup>354)</sup> <sup>355)</sup> <sup>356)</sup> <sup>357)</sup> <sup>358)</sup> <sup>359)</sup> <sup>360)</sup> <sup>361)</sup> <sup>362)</sup> <sup>363)</sup> <sup>364)</sup> <sup>365)</sup> <sup>366)</sup> <sup>367)</sup> <sup>368)</sup> <sup>369)</sup> <sup>370)</sup> <sup>371)</sup> <sup>372)</sup> <sup>373)</sup> <sup>374)</sup> <sup>375)</sup> <sup>376)</sup> <sup>377)</sup> <sup>378)</sup> <sup>379)</sup> <sup>380)</sup> <sup>381)</sup> <sup>382)</sup> <sup>383)</sup> <sup>384)</sup> <sup>385)</sup> <sup>386)</sup> <sup>387)</sup> <sup>388)</sup> <sup>389)</sup> <sup>390)</sup> <sup>391)</sup> <sup>392)</sup> <sup>393)</sup> <sup>394)</sup> <sup>395)</sup> <sup>396)</sup> <sup>397)</sup> <sup>398)</sup> <sup>399)</sup> <sup>400)</sup> <sup>401)</sup> <sup>402)</sup> <sup>403)</sup> <sup>404)</sup> <sup>405)</sup> <sup>406)</sup> <sup>407)</sup> <sup>408)</sup> <sup>409)</sup> <sup>410)</sup> <sup>411)</sup> <sup>412)</sup> <sup>413)</sup> <sup>414)</sup> <sup>415)</sup> <sup>416)</sup> <sup>417)</sup> <sup>418)</sup> <sup>419)</sup> <sup>420)</sup> <sup>421)</sup> <sup>422)</sup> <sup>423)</sup> <sup>424)</sup> <sup>425)</sup> <sup>426)</sup> <sup>427)</sup> <sup>428)</sup> <sup>429)</sup> <sup>430)</sup> <sup>431)</sup> <sup>432)</sup> <sup>433)</sup> <sup>434)</sup> <sup>435)</sup> <sup>436)</sup> <sup>437)</sup> <sup>438)</sup> <sup>439)</sup> <sup>440)</sup> <sup>441)</sup> <sup>442)</sup> <sup>443)</sup> <sup>444)</sup> <sup>445)</sup> <sup>446)</sup> <sup>447)</sup> <sup>448)</sup> <sup>449)</sup> <sup>450)</sup> <sup>451)</sup> <sup>452)</sup> <sup>453)</sup> <sup>454)</sup> <sup>455)</sup> <sup>456)</sup> <sup>457)</sup> <sup>458)</sup> <sup>459)</sup> <sup>460)</sup> <sup>461)</sup> <sup>462)</sup> <sup>463)</sup> <sup>464)</sup> <sup>465)</sup> <sup>466)</sup> <sup>467)</sup> <sup>468)</sup> <sup>469)</sup> <sup>470)</sup> <sup>471)</sup> <sup>472)</sup> <sup>473)</sup> <sup>474)</sup> <sup>475)</sup> <sup>476)</sup> <sup>477)</sup> <sup>478)</sup> <sup>479)</sup> <sup>480)</sup> <sup>481)</sup> <sup>482)</sup> <sup>483)</sup> <sup>484)</sup> <sup>485)</sup> <sup>486)</sup> <sup>487)</sup> <sup>488)</sup> <sup>489)</sup> <sup>490)</sup> <sup>491)</sup> <sup>492)</sup> <sup>493)</sup> <sup>494)</sup> <sup>495)</sup> <sup>496)</sup> <sup>497)</sup> <sup>498)</sup> <sup>499)</sup> <sup>500)</sup> <sup>501)</sup> <sup>502)</sup> <sup>503)</sup> <sup>504)</sup> <sup>505)</sup> <sup>506)</sup> <sup>507)</sup> <sup>508)</sup> <sup>509)</sup> <sup>510)</sup> <sup>511)</sup> <sup>512)</sup> <sup>513)</sup> <sup>514)</sup> <sup>515)</sup> <sup>516)</sup> <sup>517)</sup> <sup>518)</sup> <sup>519)</sup> <sup>520)</sup> <sup>521)</sup> <sup>522)</sup> <sup>523)</sup> <sup>524)</sup> <sup>525)</sup> <sup>526)</sup> <sup>527)</sup> <sup>528)</sup> <sup>529)</sup> <sup>530)</sup> <sup>531)</sup> <sup>532)</sup> <sup>533)</sup> <sup>534)</sup> <sup>535)</sup> <sup>536)</sup> <sup>537)</sup> <sup>538)</sup> <sup>539)</sup> <sup>540)</sup> <sup>541)</sup> <sup>542)</sup> <sup>543)</sup> <sup>544)</sup> <sup>545)</sup> <sup>546)</sup> <sup>547)</sup> <sup>548)</sup> <sup>549)</sup> <sup>550)</sup> <sup>551)</sup> <sup>552)</sup> <sup>553)</sup> <sup>554)</sup> <sup>555)</sup> <sup>556)</sup> <sup>557)</sup> <sup>558)</sup> <sup>559)</sup> <sup>560)</sup> <sup>561)</sup> <sup>562)</sup> <sup>563)</sup> <sup>564)</sup> <sup>565)</sup> <sup>566)</sup> <sup>567)</sup> <sup>568)</sup> <sup>569)</sup> <sup>570)</sup> <sup>571)</sup> <sup>572)</sup> <sup>573)</sup> <sup>574)</sup> <sup>575)</sup> <sup>576)</sup> <sup>577)</sup> <sup>578)</sup> <sup>579)</sup> <sup>580)</sup> <sup>581)</sup> <sup>582)</sup> <sup>583)</sup> <sup>584)</sup> <sup>585)</sup> <sup>586)</sup> <sup>587)</sup> <sup>588)</sup> <sup>589)</sup> <sup>590)</sup> <sup>591)</sup> <sup>592)</sup> <sup>593)</sup> <sup>594)</sup> <sup>595)</sup> <sup>596)</sup> <sup>597)</sup> <sup>598)</sup> <sup>599)</sup> <sup>600)</sup> <sup>601)</sup> <sup>602)</sup> <sup>603)</sup> <sup>604)</sup> <sup>605)</sup> <sup>606)</sup> <sup>607)</sup> <sup>608)</sup> <sup>609)</sup> <sup>610)</sup> <sup>611)</sup> <sup>612)</sup> <sup>613)</sup> <sup>614)</sup> <sup>615)</sup> <sup>616)</sup> <sup>617)</sup> <sup>618)</sup> <sup>619)</sup> <sup>620)</sup> <sup>621)</sup> <sup>622)</sup> <sup>623)</sup> <sup>624)</sup> <sup>625)</sup> <sup>626)</sup> <sup>627)</sup> <sup>628)</sup> <sup>629)</sup> <sup>630)</sup> <sup>631)</sup> <sup>632)</sup> <sup>633)</sup> <sup>634)</sup> <sup>635)</sup> <sup>636)</sup> <sup>637)</sup> <sup>638)</sup> <sup>639)</sup> <sup>640)</sup> <sup>641)</sup> <sup>642)</sup> <sup>643)</sup> <sup>644)</sup> <sup>645)</sup> <sup>646)</sup> <sup>647)</sup> <sup>648)</sup> <sup>649)</sup> <sup>650)</sup> <sup>651)</sup> <sup>652)</sup> <sup>653)</sup> <sup>654)</sup> <sup>655)</sup> <sup>656)</sup> <sup>657)</sup> <sup>658)</sup> <sup>659)</sup> <sup>660)</sup> <sup>661)</sup> <sup>662)</sup> <sup>663)</sup> <sup>664)</sup> <sup>665)</sup> <sup>666)</sup> <sup>667)</sup> <sup>668)</sup> <sup>669)</sup> <sup>670)</sup> <sup>671)</sup> <sup>672)</sup> <sup>673)</sup> <sup>674)</sup> <sup>675)</sup> <sup>676)</sup> <sup>677)</sup> <sup>678)</sup> <sup>679)</sup> <sup>680)</sup> <sup>681)</sup> <sup>682)</sup> <sup>683)</sup> <sup>684)</sup> <sup>685)</sup> <sup>686)</sup> <sup>687)</sup> <sup>688)</sup> <sup>689)</sup> <sup>690)</sup> <sup>691)</sup> <sup>692)</sup> <sup>693)</sup> <sup>694)</sup> <sup>695)</sup> <sup>696)</sup> <sup>697)</sup> <sup>698)</sup> <sup>699)</sup> <sup>700)</sup> <sup>701)</sup> <sup>702)</sup> <sup>703)</sup> <sup>704)</sup> <sup>705)</sup> <sup>706)</sup> <sup>707)</sup> <sup>708)</sup> <sup>709)</sup> <sup>710)</sup> <sup>711)</sup> <sup>712)</sup> <sup>713)</sup> <sup>714)</sup> <sup>715)</sup> <sup>716)</sup> <sup>717)</sup> <sup>718)</sup> <sup>719)</sup> <sup>720)</sup> <sup>721)</sup> <sup>722)</sup> <sup>723)</sup> <sup>724)</sup> <sup>725)</sup> <sup>726)</sup> <sup>727)</sup> <sup>728)</sup> <sup>729)</sup> <sup>730)</sup> <sup>731)</sup> <sup>732)</sup> <sup>733)</sup> <sup>734)</sup> <sup>735)</sup> <sup>736)</sup> <sup>737)</sup> <sup>738)</sup> <sup>739)</sup> <sup>740)</sup> <sup>741)</sup> <sup>742)</sup> <sup>743)</sup> <sup>744)</sup> <sup>745)</sup> <sup>746)</sup> <sup>747)</sup> <sup>748)</sup> <sup>749)</sup> <sup>750)</sup> <sup>751)</sup> <sup>752)</sup> <sup>753)</sup> <sup>754)</sup> <sup>755)</sup> <sup>756)</sup> <sup>757)</sup> <sup>758)</sup> <sup>759)</sup> <sup>760)</sup> <sup>761)</sup> <sup>762)</sup> <sup>763)</sup> <sup>764)</sup> <sup>765)</sup> <sup>766)</sup> <sup>767)</sup> <sup>768)</sup> <sup>769)</sup> <sup>770)</sup> <sup>771)</sup> <sup>772)</sup> <sup>773)</sup> <sup>774)</sup> <sup>775)</sup> <sup>776)</sup> <sup>777)</sup> <sup>778)</sup> <sup>779)</sup> <sup>780)</sup> <sup>781)</sup> <sup>782)</sup> <sup>783)</sup> <sup>784)</sup> <sup>785)</sup> <sup>786)</sup> <sup>787)</sup> <sup>788)</sup> <sup>789)</sup> <sup>790)</sup> <sup>791)</sup> <sup>792)</sup> <sup>793)</sup> <sup>794)</sup> <sup>795)</sup> <sup>796)</sup> <sup>797)</sup> <sup>798)</sup> <sup>799)</sup> <sup>800)</sup> <sup>801)</sup> <sup>802)</sup> <sup>803)</sup> <sup>804)</sup> <sup>805)</sup> <sup>806)</sup> <sup>807)</sup> <sup>808)</sup> <sup>809)</sup> <sup>810)</sup> <sup>811)</sup> <sup>812)</sup> <sup>813)</sup> <sup>814)</sup> <sup>815)</sup> <sup>816)</sup> <sup>817)</sup> <sup>818)</sup> <sup>819)</sup> <sup>820)</sup> <sup>821)</sup> <sup>822)</sup> <sup>823)</sup> <sup>824)</sup> <sup>825)</sup> <sup>826)</sup> <sup>827)</sup> <sup>828)</sup> <sup>829)</sup> <sup>830)</sup> <sup>831)</sup> <sup>832)</sup> <sup>833)</sup> <sup>834)</sup> <sup>835)</sup> <sup>836)</sup> <sup>837)</sup> <sup>838)</sup> <sup>839)</sup> <sup>840)</sup> <sup>841)</sup> <sup>842)</sup> <sup>843)</sup> <sup>844)</sup> <sup>845)</sup> <sup>846)</sup> <sup>847)</sup> <sup>848)</sup> <sup>849)</sup> <sup>850)</sup> <sup>851)</sup> <sup>852)</sup> <sup>853)</sup> <sup>854)</sup> <sup>855)</sup> <sup>856)</sup> <sup>857)</sup> <sup>858)</sup> <sup>859)</sup> <sup>860)</sup> <sup>861)</sup> <sup>862)</sup> <sup>863)</sup> <sup>864)</sup> <sup>865)</sup> <sup>866)</sup> <sup>867)</sup> <sup>868)</sup> <sup>869)</sup> <sup>870)</sup> <sup>871)</sup> <sup>872)</sup> <sup>873)</sup> <sup>874)</sup> <sup>875)</sup> <sup>876)</sup> <sup>877)</sup> <sup>878)</sup> <sup>879)</sup> <sup>880)</sup> <sup>881)</sup> <sup>882)</sup> <sup>883)</sup> <sup>884)</sup> <sup>885)</sup> <sup>886)</sup> <sup>887)</sup> <sup>888)</sup> <sup>889)</sup> <sup>890)</sup> <sup>891)</sup> <sup>892)</sup> <sup>893)</sup> <sup>894)</sup> <sup>895)</sup> <sup>896)</sup> <sup>897)</sup> <sup>898)</sup> <sup>899)</sup> <sup>900)</sup> <sup>901)</sup> <sup>902)</sup> <sup>903)</sup> <sup>904)</sup> <sup>905)</sup> <sup>906)</sup> <sup>907)</sup> <sup>908)</sup> <sup>909)</sup> <sup>910)</sup> <sup>911)</sup> <sup>912)</sup> <sup>913)</sup> <sup>914)</sup> <sup>915)</sup> <sup>916)</sup> <sup>917)</sup> <sup>918)</sup> <sup>919)</sup> <sup>920)</sup> <sup>921)</sup> <sup>922)</sup> <sup>923)</sup> <sup>924)</sup> <sup>925)</sup> <sup>926)</sup> <sup>927)</sup> <sup>928)</sup> <sup>929)</sup> <sup>930)</sup> <sup>931)</sup> <sup>932)</sup> <sup>933)</sup> <sup>934)</sup> <sup>935)</sup> <sup>936)</sup> <sup>937)</sup> <sup>938)</sup> <sup>939)</sup> <sup>940)</sup> <sup>941)</sup> <sup>942)</sup> <sup>943)</sup> <sup>944)</sup> <sup>945)</sup> <sup>946)</sup> <sup>947)</sup> <sup>948)</sup> <sup>949)</sup> <sup>950)</sup> <sup>951)</sup> <sup>952)</sup> <sup>953)</sup> <sup>954)</sup> <sup>955)</sup> <sup>956)</sup> <sup>957)</sup> <sup>958)</sup> <sup>959)</sup> <sup>960)</sup> <sup>961)</sup> <sup>962)</sup> <sup>963)</sup> <sup>964)</sup> <sup>965)</sup> <sup>966)</sup> <sup>967)</sup> <sup>968)</sup> <sup>969)</sup> <sup>970)</sup> <sup>971)</sup> <sup>972)</sup> <sup>973)</sup> <sup>974)</sup> <sup>975)</sup> <sup>976)</sup> <sup>977)</sup> <sup>978)</sup> <sup>979)</sup> <sup>980)</sup> <sup>981)</sup> <sup>982)</sup> <sup>983)</sup> <sup>984)</sup> <sup>985)</sup> <sup>986)</sup> <sup>987)</sup> <sup>988)</sup> <sup>989)</sup> <sup>990)</sup> <sup>991)</sup> <sup>992)</sup> <sup>993)</sup> <sup>994)</sup> <sup>995)</sup> <sup>996)</sup> <sup>997)</sup> <sup>998)</sup> <sup>999)</sup> <sup>1000)</sup> <sup>1001)</sup> <sup>1002)</sup> <sup>1003)</sup> <sup>1004)</sup> <sup>1005)</sup> <sup>1006)</sup> <sup>1007)</sup> <sup>1008)</sup> <sup>1009)</sup> <sup>1010)</sup> <sup>1011)</sup> <sup>1012)</sup> <sup>1013)</sup> <sup>1014)</sup> <sup>1015)</sup> <sup>1016)</sup> <sup>1017)</sup> <sup>1018)</sup> <sup>1019)</sup> <sup>1020)</sup> <sup>1021)</sup> <sup>1022)</sup> <sup>1023)</sup> <sup>1024)</sup> <sup>1025)</sup> <sup>1026)</sup> <sup>1027)</sup> <sup>1028)</sup> <sup>1029)</sup> <sup>1030)</sup> <sup>1031)</sup> <sup>1032)</sup> <sup>1033)</sup> <sup>1034)</sup> <sup>1035)</sup> <sup>1036)</sup> <sup>1037)</sup> <sup>1038)</sup> <sup>1039)</sup> <sup>1040)</sup> <sup>1041)</sup> <sup>1042)</sup> <sup>1043)</sup> <sup>1044)</sup> <sup>1045)</sup> <sup>1046)</sup> <sup>1047)</sup> <sup>1048)</sup> <sup>1049)</sup> <sup>1050)</sup> <sup>1051)</sup> <sup>1052)</sup> <sup>1053)</sup> <sup>1054)</sup> <sup>1055)</sup> <sup>1056)</sup> <sup>1057)</sup> <sup>1058)</sup> <sup>1059)</sup> <sup>1060)</sup> <sup>1061)</sup> <sup>1062)</sup> <sup>1063)</sup> <sup>1064)</sup> <sup>1065)</sup> <sup>1066)</sup> <sup>1067)</sup> <sup>1068)</sup> <sup>1069)</sup> <sup>1070)</sup> <sup>1071)</sup> <sup>1072)</sup> <sup>1073)</sup> <sup>1074)</sup> <sup>1075)</sup> <sup>1076)</sup> <sup>1077)</sup> <sup>1078)</sup> <sup>1079)</sup> <sup>1080)</sup> <sup>1081)</sup> <sup>1082)</sup> <sup>1083)</sup> <sup>1084)</sup> <sup>1085)</sup> <sup>1086)</sup> <sup>1087)</sup> <sup>1088)</sup> <sup>1089)</sup> <sup>1090)</sup> <sup>1091)</sup> <sup>1092)</sup> <sup>1093)</sup> <sup>1094)</sup> <sup>1095)</sup> <sup>1096)</sup> <sup>1097)</sup> <sup>1098)</sup> <sup>1099)</sup> <sup>1100)</sup> <sup>1101)</sup> <sup>1102)</sup> <sup>1103)</sup> <sup>1104)</sup> <sup>1105)</sup> <sup>1106)</sup> <sup>1107)</sup> <sup>1108)</sup> <sup>1109)</sup> <sup>1110)</sup> <sup>1111)</sup> <sup>1112)</sup> <sup>1113)</sup> <sup>1114)</sup> <sup>1115)</sup> <sup>1116)</sup> <sup>1117)</sup> <sup>1118)</sup> <sup>1119)</sup> <sup>1120)</sup> <sup>1121)</sup> <sup>1122)</sup> <sup>1123)</sup> <sup>1124)</sup> <sup>1125)</sup> <sup>1126)</sup> <sup>1127)</sup> <sup>1128)</sup> <sup>1129)</sup> <sup>1130)</sup> <sup>1131)</sup> <sup>1132)</sup> <sup>1133)</sup> <sup>1134)</sup> <sup>1135)</sup> <sup>1136)</sup> <sup>1137)</sup> <sup>1138)</sup> <sup>1139)</sup> <sup>1140)</sup> <sup>1141)</sup> <sup>1142)</sup> <sup>1143)</sup> <sup>1144)</sup> <sup>1145)</sup> <sup>1146)</sup> <sup>1147)</sup> <sup>1148)</sup> <sup>1149)</sup> <sup>1150)</sup> <sup>1151)</sup> <sup>1152)</sup> <sup>1153)</sup> <sup>1154)</sup> <sup>1155)</sup> <sup>1156)</sup> <sup>1157)</sup> <sup>1158)</sup> <sup>1159)</sup> <sup>1160)</sup> <sup>1161)</sup> <sup>1162)</sup> <sup>1163)</sup> <sup>1164)</sup> <sup>1165)</sup> <sup>1166)</sup> <sup>1167)</sup> <sup>1168)</sup> <sup>1169)</sup> <sup>1170)</sup> <sup>1171)</sup> <sup>1172)</sup> <sup>1173)</sup> <sup>1174)</sup> <sup>1175)</sup> <sup>1176)</sup> <sup>1177)</sup> <sup>1178)</sup> <sup>1179)</sup> <sup>1180)</sup> <sup>1181)</sup> <sup>1182)</sup> <sup>1183)</sup> <sup>1184)</sup> <sup>1185)</sup> <sup>1186)</sup> <sup>1187)</sup> <sup>1188)</sup> <sup>1189)</sup> <sup>1190)</sup> <sup>1191)</sup> <sup>1192)</sup> <sup>1193)</sup> <sup>1194)</sup> <sup>1195)</sup> <sup>1196)</sup> <sup>1197)</sup> <sup>1198)</sup> <sup>1199)</sup> <sup>1200)</sup> <sup>1201)</sup> <sup>1202)</sup> <sup>1203)</sup> <sup>1204)</sup> <sup>1205)</sup> <sup>1206)</sup> <sup>1207)</sup> <sup>1208)</sup> <sup>1209)</sup> <sup>1210)</sup> <sup>1211)</sup> <sup>1212)</sup> <sup>1213)</sup> <sup>1214)</sup> <sup>1215)</sup> <sup>1216)</sup> <sup>1217)</sup> <sup>1218)</sup> <sup>1219)</sup> <sup>1220)</sup> <sup>1221)</sup> <sup>1222)</sup> <sup>1223)</sup> <sup>1224)</sup> <sup>1225)</sup> <sup>1226)</sup> <sup>1227)</sup> <sup>1228)</sup> <sup>1229)</sup> <sup>1230)</sup> <sup>1231)</sup> <sup>1232)</sup> <sup>1233)</sup> <sup>1234)</sup> <sup>1235)</sup> <sup>1236)</sup> <sup>1237)</sup> <sup>1238)</sup> <sup>1239)</sup> <sup>1240)</sup> <sup>1241)</sup> <sup>1242)</sup> <sup>1243)</sup> <sup>1244)</sup> <sup>1245)</sup> <sup>1246)</sup> <sup>1247)</sup> <sup>1248)</sup> <sup>1249)</sup> <sup>1250)</sup> <sup>1251)</sup> <sup>1252)</sup> <sup>1253)</sup> <sup>1254)</sup> <sup>1255)</sup> <sup>1256)</sup> <sup>1257)</sup> <sup>1258)</sup> <sup>1259)</sup> <sup>1260)</sup> <sup>1261)</sup> <sup>1262)</sup> <sup>1263)</sup> <sup>1264)</sup> <sup>1265)</sup> <sup>1266)</sup> <sup>1267)</sup> <sup>1268)</sup> <sup>1269)</sup> <sup>1270)</sup> <sup>1271)</sup> <sup>1272)</sup> <sup>1273)</sup> <sup>1274)</sup> <sup>1275)</sup> <sup>1276)</sup> <sup>1277)</sup> <sup>1278)</sup> <sup>1279)</sup> <sup>1280)</sup> <sup>1281)</sup> <sup>1282)</sup> <sup>1283)</sup> <sup>1284)</sup> <sup>1285)</sup> <sup>1286)</sup> <sup>1287)</sup> <sup>1288)</sup> <sup>1289)</sup> <sup>1290)</sup> <sup>1291)</sup> <sup>1292)</sup> <sup>1293)</sup> <sup>1294)</sup> <sup>1295)</sup> <sup>1296)</sup> <sup>1297)</sup> <sup>1298)</sup> <sup>1299)</sup> <sup>1300)</sup> <sup>1301)</sup> <sup>1302)</sup> <sup>1303)</sup> <sup>1304)</sup> <sup>1305)</sup> <sup>1306)</sup> <sup>1307)</sup> <sup>1308)</sup> <sup>1309)</sup> <sup>1310)</sup> <sup>1311)</sup> <sup>1312)</sup> <sup>1313)</sup> <sup>1314)</sup> <sup>1315)</sup> <sup>1316)</sup> <sup>1317)</sup> <sup>1318)</sup> <sup>1319)</sup> <sup>1320)</sup> <sup>1321)</sup> <sup>1322)</sup> <sup>1323)</sup> <sup>1324)</sup> <sup>1325)</sup> <sup>1326)</sup> <sup>1327)</sup> <sup>1328)</sup> <sup>1329)</sup> <sup>1330)</sup> <sup>1331)</sup> <sup>1332)</sup> <sup>1333)</sup> <sup>1334)</sup> <sup>1335)</sup> <sup>1336)</sup> <

31  
997

も「社会主義」によりてのみ可能なるを確信  
 するとする。1) 英國の口利イも亦  
 藩御者によりて利益を得たのみならず、  
 他國に遠くの東洋にあり、且つ英國各部  
 令の短信的連合は資本主義の下に於ては不可  
 能あり、この目的を達するに及ばず、  
 は一先づ破壊せらるべきものである。然る後かく  
 の如き連合は社会主義的基礎の上に可能とな  
 るに及ぶ。2) 之等によりて社会主義  
 的の抱負(的)に於ても、  
 實質的抱負(的)

他中在在と諸事とに對して、  
 的開發を援助することにより、  
 在を討つんとするの趣旨を窺ふに足る。孤立  
 は無力であり、結合は力である。各民族を地域を結合する一大共同社会の成立は  
 自由の抱負(的)に於ても、  
 實質的抱負(的)

大東洋的抱負(的)に終止すること  
 さい。地球上に實質的抱負(的)を轉位通地  
 有する以上人口及び資材の國際的移動は依  
 として行はれざるを得ず。而して短信的及び  
 文化的の抱負(的)に於ては、  
 的開發の上には、指導がなくては

1) Poeschel, Kolonialfrage. S. 109  
 2) Roy. 前出論文. P. 22

以社会主義の  
 必然的要素を  
 有す。



399

には、この主義は今日には既に全滅した。
 には、植民地は征服せられたる所であり、
 の住民は征服せられたる臣民であるから、
 には、本國及び本國人と同等の利益及び権利
 を與ふべきにあらず。各植民地の経済的
 一面は高きの注意を用ふるべき最良の政策
 として主張する。植民政策の中心目的
 は本國の利益を説くよりも、先住者
 に対する保護も亦その範囲に於ての利益

2) Denancy, E. Philosophie de la Colonisation. pp. 169-170. 206

せんとするの主義は、一七六五年マルチ
 ニークの詔書に佛國々王の命令に「植
 民地と佛國府領との差異は、手段と目的との
 差異の如し」といへるは、植民地を以て本國の
 利益の爲めに存在するの手段と見らるゝであつ
 て、従来主義の措取を最もよく表現せるもの
 である。この主義によれば、植民地は先住者
 と認めず、経済的地位について本國の利益
 に通ずる如く産業及び貿易上の制限を加へ、
 先住者の社会的生活について教化を欲する

1) Girault, A. Principes de Colonisation. Tome I, P. 161



25  
40/

開化主義植民地に對し全然本國と同一の待遇を與へんとするものである。  
 植民者は本國民としての資格身分をそのまゝ携えて植民地に移るに過ぎざるが  
 故に、本國に於ける同一の權利、同一の保障、同一の自由を賦與すべく、植民  
 地は本國の延長なりと爲す。

法律 有價者は對しては地帯者と同様の法  
 律に社會上ノ制度は優待しんとするもの  
 がある。

リーカ社又アウビア人に對する政策は、隔離  
 融合及び放任の三者中、融合を以て最良の策  
 ありとし、

地帯者に完全なる同化に因化することを得て  
 りふれば其の利益も、経済的政策的法律

見地 地帯者は西諸國に對して一律するもの  
 あり、

一 大多數の家族利を以て急進的に改革せよ。こ  
 の三長に於て産せらるるものは、細末の異は容易  
 に改め得るべきである。

學と地帯政策の唯一の途であるとする。

ガロールも、依屬主義は地帯地の救済に  
 より、自主主義は地帯地の独立により、教育

本國に對しては失ふべきものあり、同化主義を  
 以て最良の統治政策とする。

1) Leroy-Beaulieu, Colonisation chez les Peuples Modernes. P. 416-418.  
 2) Girault, 前出, Tome I. P. 85.

自主主義

351

76  
権  
402

然るに同化主義は常々一筆に流す詳細すべ  
 しか如く、(社会群の特殊的存在の事実を等視  
 するの故に、その可成り却つて不良にして、有  
 位者の社会生活に於ける堅固基<sup>は</sup>より<sup>こ</sup>この不  
 満反抗を激化するの弊害を經驗した。こゝに  
 於てか植民地の自主的發展を中心とする政策  
 の勢力を占めたり、従来同化政策の代表的植  
 民地と稱せられた佛國に於てすら、ポアソカ  
 レ内閣の植民大臣サロームは同化主義の失敗を  
 承認し、(植民地<sup>自主主義に基く</sup>政策<sup>は</sup>より<sup>こ</sup>は何等植民地  
 の分譲を要するの結果を呈せしむべく、却つ  
 て之によりて協同政策の實を擧ぐるを得し  
 と提唱した。)<sup>(Sarrant)</sup> 従来主義政策の結果生國獨立  
 の経路をなめし英國は、カチガを始りとして  
 とう<sup>(有力なる)</sup> 移植植民地には一<sup>(植民地)</sup> ドミニオン<sup>(植</sup>  
 民地<sup>を</sup>認められたが、世界大戰の勃發によりて國  
 主義運動勃發するや、愛蘭に於てこそドミニオン  
 植民地<sup>(憲法)</sup> 印<sup>(憲法)</sup> 植民地に於ては自治の範圍を  
 擴張し<sup>(せざるを得なかつた)</sup> 植民地<sup>(世界)</sup> 植民地は自主發展の範圍を  
 擴張し<sup>(せざるを得なかつた)</sup> 植民地<sup>(世界)</sup> 植民地は自主發展の範圍を

6) Sarrant, A. La Mise en Valeur des Colonies  
 Françaises. 1923. PP. 99. 105. 123-4.







39

405

この年は南米諸国に特許を授けて成る  
 大が、領土、宣戦講和、領土獲得及び統治等  
 政治上の特権を賜與せられたるは断くイヤ  
 此の二世一六〇〇の時にあつた。従つ  
 て当時の諸植民地会社は何れも商業独占権を有  
 し、他國に對してのみならず、他の他國商人  
 に対しても亦排他独占的の通商的利益を主張  
 せしむる土人を掠奪するに及ぶより巨利  
 を博したるのである。然るに十九世紀後半の  
 諸國に於ける特許権は、商業の専断の専ら  
 なる事業は統治行政にありて経済的利権を在  
 業利得を目的とせず、<sup>(直接の)</sup> 特許又経済的利権  
 の一つにても土地に關する利権の獲得を主と  
 して通商貿易を主とせざりし。而して之によ  
 り、<sup>(宗教)</sup> 奴隷廢止、<sup>(酒類)</sup> 酒類の禁止、<sup>(宗教)</sup> 土人の  
 宗教的尊重等土人保護の方針によるべきこ  
 と、及びその統治につき政府の府置なる監督  
 に服すべきこと、の三長に於て特に前期植民  
 地の特許と異なる。即ち第一は商業上の門戸

(注へば)  
 1) 後期植民地会社の模範となつた英國北ボルネオ会社の特  
 許状には (四) 行政上の実費に充つるため関税と課税の權利を  
 賦與す外、兩事は何人に対しても自由に開放せらる(六十年)。  
 (五) 会社は全力を擧げて奴隷廢止を行はせむべからず(七十年)。又土人の  
 宗教的信仰を尊重し、<sup>(宗教)</sup> 土人の宗教的習慣に干渉す  
 るを得ず(八十年)。 (英國東アフリカ会社の特許状には尚、酒類の販  
 賣を能く限り禁止すべき義務を課せらる) (九) 会社は政府の同  
 意なくしてこの權利を讓渡すを得ず(四十年)。ボルネオ王はス  
 王の王に對する一切の紛争、並に会社と外國との紛争は其の解決

を政府に委ねし(六十年)とせられた。他の特許状の  
 社に擬ねるの例に倣つた。 (特許植民地会社判例研究下、  
 P. 140-141, 248-249. (東亞経済調査會発行) 特許資料  
 十卷四号)

(注外)  
 英國東アフリカ会社及南アフリカ会社に於ける酒類の販賣を能く限り  
 禁止すべしとの事項があつた。



41  
積  
407

許状も見ることも出来る。恰も十九世紀末  
 の特許会社としての私的治御の結果獲得せる統  
 治其他の利権を、國家によりて承認保護せし  
 るに類する。而して特許の方式は  
 外圍の反對を催すこと、領土擴張を果た  
 し得た如く、委任統治の制度は列國協約  
 の下は、領土擴張を妨げ、米國及び國內の合併  
 の平和論者の反對を緩和し、新植民地  
 を獲得の機会を無きにし、あるが  
 條件の委任統治地域に於て然りである。

委任國はもとより一の國家であるが、  
 治行政を以て其の治御の本質とし、  
 特許会社がいかに (Compagnies de Gouvernements)  
 と呼ばれ、實力に於て到達せし  
 聯盟規約第二十二條には、B式委任統治の  
 条下に、他の聯盟國の通商貿易に對し均等の  
 待遇を確保するを要するものと定む。此の後  
 特許会社の高潔独占権を認めらざりしに  
 該當する。而して是は植民地領有の果實である。

2) Wüst, E.C. Les Grandes Compagnies Coloniales  
 Anglaises du XIX<sup>e</sup> Siècle. PP. 31. 227.



93  
409. 植

梯の取扱、並に貨物の輸出入に關する均等の  
 梯をふふべきことを約して居る。1) 然るに  
 C亦委任統治地域に對しては之等地上の林  
 野的義務帯は明くもなく、又「委任國領土の構  
 造分として其の國法の下に施政を行ふこと  
 最善とする」との理由の下に、実行せらるるに  
 當り、<sup>2)</sup> 即ちC式委任國は排他的の經濟的利益  
 を享有する。  
 B式  
 委任統治の委任國は  
 上述の義務を負ひ、C式委任國も亦土着人民  
 の利益の爲前記の保障をふふことを要す  
 るものとせらる。A式については明文無きも各  
 委任國は委任統治条約に於て同様の義務を負  
 担して居る。是も前後期特許地及<sup>に於けると同く</sup>社人  
 道の土人保護義務の精神の發現あり、近代  
 地政學が<sup>東洋</sup>社會生活に於ける應用の  
 手段を<sup>東洋</sup>却つて<sup>東洋</sup>特異的存在と尊重し  
 、<sup>東洋</sup>社會的保護を與ふるの方針なることと示す  
 もつてある。且つ實際に於ては委任國の義務

本種<sup>種族</sup>在り尤<sup>種族</sup>在り公ノ秩序及善良ノ風俗ニ反セサル限り良心及信  
 教ノ自由ヲ許與シ、奴隸ノ賣買又ハ武器若ハ火酒類ノ取引ノ如キ弊習ヲ禁止

1) Mandate for Mesopotamia. 第11條. Mandate for Palestine. 第18條.  
 2) 日本はC式マニフェストに於ても林野均等と主張した。他のC式委任國(露、西葡等)の反対のためになされた。

62

植林の基礎に於ける保護を講ずるべしとの旨  
保護の基 植林の基礎に於ける保護を講ずるべしとの旨  
言ふに依りて此の事なる

次に、各自治体の自治体長に於ては、  
政令に依りて、各自治体の自治体長に於ては、  
は所管の事務に依りて、各自治体の自治体長に於ては、  
すす年報と所管の事務に依りて、各自治体の自治体長に於ては、  
並に常設委員会を設置し、且つその執行に依りて、  
報を受理調査し、且つその執行に依りて、  
やの事務に依りて、各自治体の自治体長に於ては、

るものと定む。而して、  
昭和一九二一年十月に於ては、  
議を仰ぎて、各自治体の自治体長に於ては、  
空理調査し、各自治体の自治体長に於ては、  
之の意向に依りて、各自治体の自治体長に於ては、  
面に依りて、各自治体の自治体長に於ては、  
各自治体の自治体長に於ては、  
と受理調査し、各自治体の自治体長に於ては、  
の政令に依りて、各自治体の自治体長に於ては、  
各自治体の自治体長に於ては、

1) 左の(ア)森林利権の持許が主員の権利若くは世帯を有する  
ことなきやに就ては向度答があつた。(Minutes. 前出 p. 20)

64  
4/0

45  
411

(+) ATHINA

又受任団に於て(要)と登して居るのひある。  
 而して之は後期特許令社がその施政につき  
 家の監督権に服したることと類似する。  
 此等は、  
 特許令社に於ける監督権に比し  
 て微力であることと認めざるを得ない。  
 特許令社中最も重要なる(国家)の監督ありと云  
 けたるは(英)南阿会社であるが、同会社は  
 の施政につき地子大臣に年報を提出すべき外  
 (七) 英女帝性況治利交も同様である、特許の期  
 限を二十五十年とし期限満了後は必要に依り  
 二十箇年以内之を更新するを得べしと定め、又  
 一八九八年以後は英内政政府の代表者 (Resident  
 Commissioner) の令社の行政地域たるローディン  
 に駐在することとなつた。此外ナイロビヤ一  
 社、英女帝阿令社、及び南阿令社にはいつれ  
 も特許撤回の規定があつたが、殊に後の二否  
 については令社が特許状の規定に違反する  
 其の仕務遂行の無力せしと認められたる  
 故に、  
 英女帝特許取消権を留保した。

1) Wiarty ~~...~~ P. 231-234  
 E.C. Les Grandes Compagnies Coloniales  
 Anglaises du XIX<sup>e</sup> Siècle. 1899. P. 231-234.



85

委任統治制にありては常任委任統治委員會  
委員其他の國際聯盟理事會代表者の委任統治  
地域に駐在するものなく、その巡回視察する  
も行はれたるを未だ聞かぬ。委任統治の期  
限は「獨立國として承認を受け得る發達の程  
度に達したる部族に對し、其の自ら得る時  
期に達する迄」を以て何等の期限を置かぬ。  
而して委任國の義務懈怠若しくは義務遂行不能  
力の場合に於ける委任の撤回取消等の制  
裁規定を缺いて居る。是れ故に、常任委員會

の審査が如何に周到精緻であつても、是は受  
任國に對する道德的效力を有するに止り、現  
實の監督力は尚不徹底たるを免れぬといふ  
る。  
（是後、）  
委任統治制が特許會社の特許状に勝るの  
點は、それが明瞭に委任統治は原住者の福祉及  
開發を計るを目的とし、従つて委任統治の  
性質は「後見」であり、殊にA式委任統治にあり  
ては早晩該部族の自立の域に達せしむるを  
標榜せる點にある。即ち原住者の利益と其の  
保護

86

412

(4) ATHENA

自主独立とは置くものであり、原住者が  
 植民地統治の中心的受益者の地位に置かる。  
 (原住民族に對する)  
 保護主義自主主義の植民政策の今日迄に於け  
 る到達点を示すものが比喩的表現の政治文である。  
 之を旧時の掠奪主義経済主義的植民主義  
 と比較すれば、進意するべき程度と言はねばならない。  
 植民政策は統治の根本の過程に於て、榮  
 任の利己的動機が顯著に存在するを意味する。  
 戦争の結果、土耳其の支配を脱し、左の部族中、  
 最も國際聯盟の保護を必要とし、且つ進んで  
 委任統治制度を要求したるものはアルメニア  
 であつた。聯合國のうち何國もこれに對して  
 委任の責任を負はんとすものなかつた。  
 アルメニアに對する軍事的、政治的、種族上  
 的、経済的の上下利益と、種族的一体化のあり  
 たる情状を、アルメニアは北に走つて  
 ヴァイエト<sup>南支那</sup>國の聯邦の一節となつた。これは  
 若し委任統治制度が真に弱者に對する後  
 見を以て文明の非望なき使來なりとし、<sup>軍事</sup>  
 (旧) mandate なる決の示す如く無報の以て精求  
 するならば、斯くの如きことは有り得ない。

47  
413

48

414

ATHENA (4)

48

現在諸國家の行  
 動は利己的立場を以て、責任政治主義  
 下自己の利益の監督は不徹底なるを免れず  
 とするも、之を爲めに責任政治の精神、その  
 への努力、そのへの一般の傾向の（重要）を看過  
 してはならざり、亦して是れは責任政治  
 地域に於ては、一般の責任地に属する向  
 義あり、而して是れは左下に責任政治地域に  
 のみならず、一般の責任地に属する時代の要  
 求であり傾向にある様か。尤も、  
 資本家階級の管轄を中心とする（社会）  
 に於て、如何なる程度に於ては、  
 責任を期待しうべきか、又は責任の  
 責任、張曲は資本家の國家階級に對し、如何なる  
 責任を負ふべきか、は研究に値する興味ある  
 題目と言はねばならぬ。